The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	この特集について
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 8, p. 3-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10448
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集

教室のなかの／そとへの哲学

――高校で哲学を教える――

この特集について

この特集は、2000年２月19日に行われた第５回（通算17回）臨床哲学研究会「哲学教育の可能性と不可能性――高校の授業から」の記録である。

教育グループの活動

私たちは、98年度から臨床哲学研究室で教育について考えるグループとして活動をはじめ、ディスカッションや読書会を定期的に行う他に、公開の研究会を継続して開いてきました。

第１回は特に「不登校」問題を取りあげました。それは、「不登校」を、教師として、親として、また本人として経験した者が研究会のメンバーのなかにあり、その個別の現象を通して、現在の「学校」の位置を展望することができるのではないか、そこから、いま現在不登校を経験している人たちに何かフィードバックするものが見えてくるのではないか、という期待があったからです。また、第２回研究会では『不登校新聞』の理事を務めている、大阪府立今宮工業高校定時制教員の山田潤

氏にも講演していただきました。

これらの研究会については『メチエ』vol. 1（98年）・vol. 2（99年）にまとめられていますが、その研究会を通して、何かまとまった見解が生まれるというより、さらに次の課題が次々と生まれました。

そもそも「学ぶ」とはどういう意味であったのか、学問や知識の学びに「学校」や教師の果たす役割とは何なのか、という疑問。「学校に行かなければならない」を規範の問題として規範の内面化の過程について考えるとき、規範の根拠はどこにあるのか、またそれに代わる規範は見つけることができるのか、という問題。「不登校」とは一面では私的な現象であるとしても、それを共通の問題として立てる基盤はどこに見いだせるか、「学校」の社会的な役割がいまどのように果たされているのか、などさまざまな文脈が「不登校」という現象から浮かび上がってきました。

なかでも、これらのことを議論するうえで特に「当事者性」が問われるようになりました。「不登校問題」とは誰の問題であり、規範や学ぶことの意味を考える私たちにとって、それはどういう問題なのか、という視点です。いわゆる「現場」から離れた私たちが何をここで問題にすべきなのか、ということに議論は絞られていきました。「臨床哲学」が個人に寄り添い、その個別の問いの中から普遍的な答えを導き出そうとする営みであるなら、そのことは臨床哲学に関わる私たちの姿勢の問い直しでもありました。

不登校の問題を考えることによって、私たち自身もいままで自明のこととしていたことを何度も問い直しました。もしその過程を不登校の状態に陥っている子供と共にすることができるなら、彼らがみずからの言葉を持ち、問いかけ、語るということができるかもしれない、そして彼らにとってそれは大きな支えになるのではないかと考えました。

子供たち自身が言葉をみつけるひとつの方法として、私たちは改めて「哲学の教育」、特に中等教育における哲学教育の意義とその可能性を考えたいと思い、研究会「哲学教育の可能性と不可能性——高校の授業から」（2000年2月19日）を企画しました。「自分で考えること」が疎かにされているとしばしば指摘される教育現場の、「公民」「倫理」という科目の枠組みの中で、自分で考え、自分の意見を保ちながら他者を理解する、また共感する、という「哲学的教育」を実践されている2人の先生に報告をお願いしました。それが6ページ以下の記録です。

当日のディスカッションについて

当日の議論を実りのあるものにするため、事前にある程度お二人の先生方とメールなどでやりとりし、教育班のなかで論点を整理するという作業をしました。「教える」という教師のあり方が、「自分で考えること」を阻んでしまうのではないか、というパラドックスや、学校や教室という制度的・人的制約のなかで、具体的にどのように授業を進めるのか、哲学や哲学史を教えることと自分で考えることの間にある距離をどのように繋ぐか、などを質問しました。また、なるべく具体的に話していただきたいというお願いもしました。

ディスカッションでは、論点を3つに整理しました。

1つは「自分で考える授業」とはどうしたらいいのか、2つ目が哲学の教育と専門的な哲学研究、

哲学史、というようなものとの関係、３つ目が哲学教育の目標、あるいは自分で考えることの意義という３つの柱を議論の流れとして設定しました。

誌面の都合で全て掲載することができないので、記録は特に３つ目の論点、「自分で考えることの意義」または「哲学教育の目標」についての部分を収録しました。

ディスカッションのテープ記録をまとめていて、「自分で考えること」の難しさは、特に「自分を離れて議論すること」と「自分を背負って議論すること」という２つの方向を、教室という限られた条件の中で求めていく、という点に集約されているのではないかと思われました。それはＴ氏の質問と答え（15 ページ）に代表されるものです。

また事前にお二人の先生とやりとりしたなかで、本来「哲学」とはさまざまな規範を一度問い直してしまう、一種破壊的な「毒」になる要素もあるので、中等教育ではその「危険」を回避する必要があるのではないか、という疑問が教育班のなかで出されました。当日も、主にＮ氏からその問題が提示されました（15 ページ～）。少年犯罪が相次ぐなかで、「なぜ人を殺してはいけないか」というテーゼが哲学者のなかでも真面目に議論されるこの時代に、「哲学教育」の授業で生徒に何を伝えていけばいいのか、議論が集中したように思います。

「不登校」の問題についてもディスカッションの前半に質問が出されました。掲載することができませんでしたが、フロアの参加者も、先生方も、それぞれ共通して近代の学校教育という枠組みが揺らぎ始めたという実感を持っておられました。不登校という現象について、どう対処したらいいのか先生も生徒も日々悩みながら自分の答えを探しているように見受けられました。

それぞれの答えを探す道程を生徒と共にしようとするお二人の実践を通して、「哲学の教育」の可能性を見たように思えました。

当日参加された方のご意見や質問なども、時間の都合もあり充分汲み取ることもできなかったかもしれません。このメチエを読まれて、改めてご意見などある方は、編集者まで投稿いただきたく、お願いいたします。（編）